

特集：「ドン・ボスコ生誕200周年記念」



プライマリー4年オペレッタ「ドン・ボスコは君たちのもの」

“聖ドン・ボスコ生誕200周年おめでとうございます”

静岡サレジオ修道院院長 Sr.見城 澄枝

3年間の準備期間を経て、いよいよ聖ドン・ボスコ生誕200周年のお祝いの日を迎えました。今年の1月31日は全世界のサレジアンファミリーがこぞってドン・ボスコを讃え、ドン・ボスコに感謝を表す様々なイベントが繰り広げられることでしょう。それは喜び、いのちの祭典です！

1月31日は本学園においても、小学校から高校、教職員が一堂に会し、「ドン・ボスコフェスティバル」が開催されました。有志による種々の出し物、小学校4年生によるオペレッタ、教職員のダンス、全員参加のドン・ボスコビンゴと、会場は喜びと家庭的雰囲気に包まれました。

200年の時の流れの中で、ドン・ボスコの精神はサレジオ会員、サレジアン・シ

スターズ、コオペラトリー、教職員、保護者、同窓生、志を同じくするの方々によって引き継がれてきました。この場をお借りして関わりのあるすべての方々に心からの感謝を申し上げたいと思います。特に日頃保護者との連携のもと、全身全霊をこめて子どもたちの教育に力を注いでくださる教職員の皆様には只々感謝あるのみです。

「信頼と愛があれば、子どもの心をかち得ます」と言われた創立者の言葉を、日々の教育に活かしながら、これからも委ねられた子どもたちの教育に力を注いでくださることを祈念しております。

サレジアン・ファミリーの皆様、どうぞ各々の生活の場でドン・ボスコから引き継いだ精神を大切にして、ドン・ボスコのように人々の必要に応じていくことができるよう期待しております。

『夢は続く』

『夢は続く』。ドン・ボスコ生誕200周年記念動画のタイトルです。「未来のモデルになる街。だれもが夢を実現できる街。」ブラジリアの未来を予見したドン・ボスコの言葉をアメリカのオバマ大統領が紹介し、この動画は始まります（サレジオ会日本管区HP参照）。ドン・ボスコの夢が、欧米のみならず全世界に広がっていることを感じさせるオープニングです。

そして、ドン・ボスコの3つの夢が紹介されます。「勉強したい」「神父様になりたい」「青少年の教育に命を捧げたい」ドン・ボスコはマリア様の導きに信頼し、数知れぬ困難を乗り越え、3つの夢を実現しました。そして、イタリア社会のみならず世界中にインパクトを与え、世界を変える原動力となりました。80年以上前、日本にもドン・ボスコの夢は届き、静岡をはじめ全国各地で青少年のための教育が行なわれています。

静岡サレジオのドン・ボスコ生誕200周年記念

ドン・ボスコが1886年に見た夢に、「メヤコ」(=都)と「美しい山」が登場します。「東の果て」の夢ということですので、これは日本と富士山かもしれません。ドン・ボスコが夢に見たその富士山を望む本校において、昨年よりドン・ボスコ生誕200周年記念の一年が始まりました。

まずは3月。現C9生のニューヨーク研修において、姉妹校にてドン・ボスコ生誕200周年劇を英語で披露しました。ニューヨーカーの拍手喝采は、出演したC9生にとって忘れられない思い出でしょう。ホスピタリティ溢れる歓迎ムードの中で、日本もNYもドン・ボスコの心で繋がっていることを感じました。

続いて7月。生誕記念を彩る花に「ひまわり」が選ばれると、VIDES静岡会員の皆様よりすぐにご提案を頂きました。「ひまわりを静岡サレジオいっばいに咲かせましょう！」その想いは早速形になり「静岡サレジオひまわりプロジェクト」が立ち上がりました。シール状のひまわりの花びらが用意され、幼小中高静岡サレジオ関係者1,197名が記名し、ドン・ボスコを中心に50ものひまわりが咲く大型パネルが完成しました。

夏休みも特別なものでした。生徒たちは「ドン・ボスコチャレンジ課題」に挑戦したのです。標語や詩作、人形作り、作詞・作曲、4コマ漫画、自由研究など10部門の中から好きなものを1つ選び、休みを利用して思い思いに取り組みました。

9月1日。いよいよドン・ボスコ生誕200周年開幕です。ひまわりパネルがお披露目され、記念動画を視聴し、寸劇を見て笑い、共同祈願を捧げました。またこの日より、毎週月曜日は『聖ヨハネ・ボスコへの祈り』を全校で唱えて一日を始めています。

年が明けて1月31日。「ドン・ボスコフェスティバル」が開催されました。

小中高生が一堂に会し、ドン・ボスコの祝日を例年よりいっそう華やかにお祝いし



ひまわりのパネル



ドン・ボスコ
プライマリー児童作品

ました。一番の目玉はP4生によるオペレッタ『ドン・ボスコは君たちのもの』。その他、有志によるダンス、大道芸と、日本一に輝いた一輪車の共演、高校生の「夢」プレゼンテーション、教職員も児童、生徒もみんなでダンス企画、生徒会によるマジックやドン・ボスコビンゴなど盛りだくさんで、幕間には夏季チャレンジ課題の表彰も行なわれました。

6月には恒例のサレジオ祭が行なわれます。ここでも生誕200周年をお祝いする様々な企画ができればと思っています。そして何よりも、私たちの毎日が真の「喜び」に満たされることが生誕200周年の意義ではないでしょうか。



ドン・ボスコTシャツ
プライマリー1年



オペレッタ
プライマリー4年



大道芸 一輪車ダンス
中学生



ドン・ボスコチャレンジ
人形部門



ドン・ボスコチャレンジ
自由研究部門



ドン・ボスコチャレンジ
標語部門



ドン・ボスコチャレンジ
絵画部門

『夢の続き』

生誕200周年はゴールではありません。これからもドン・ボスコの夢とチャレンジは続きます。実は、生誕「100周年」は1915年、第一次世界大戦の真っ最中でした。人類と世界の未来に光を見るのは、非常に難しい時代でした。事実、悲劇的なことにもう一つの大戦まで起きてしまったのです。それでもドン・ボスコの心は消え去りませんでした。多くの先輩方を通して、その情熱は確かにバトンタッチされています。

戦後70年の節目の年に、200周年を無事にお祝いできることは意義深いことです。神様の導きにお任せしながら、次の100年に向かって、新たな夢を歩み始める年となりますように。

宗教部 谷口 哲



ドン・ボスコチャレンジ
自由アイデア部門



ドン・ボスコチャレンジ
4コママンガ部門



教職員ダンス



ビンゴ大会

仲間たちと、心は一つ

10月24日 中高体育祭

—「雨降って地固まる」数回の雨天順延を経て、澄みわたった秋空のもと、待ちに待った体育祭が行なわれ、今年も激戦が繰りひろげられました。

本校独特の伝統の組分けは、中1高1の赤組、中2高2の緑組、中3高3の青組の3チーム。上級生の底力に後輩達がどこまで食い下がるかが、見どころです。

リレー、騎馬戦、綱引きといった定番の競技の他、靴を跳ばしたり、お尻で風船を割ったり、先生と二人三脚で走ったり、楽しい競技も目白押しでした。部活を引退して数ヶ月経つ高3生は、先輩のメンツにかけても負けられず、勢いに乗る高2生は追い上げに一致団結。そんな姿に触発されて1年生たちも必死で戦う中、午前中は抜きつ抜かれつの接戦が続きました。

昼休みをはさんで、いよいよ応援合戦。各組がリーダー中心に、工夫を凝らした綿密な台本と入念な全体練習を重ねて真っ向勝負する5分間のパフォーマンス合戦です。各組のカラーが最も強く反映され、午後の勝敗の行方をうらなう上でも重要なターニングポイントとなるこの大一番を前に、緊張感も高まります。早々に昼食を切り上げて、各組が総仕上げを完了、いよいよ渾身の演技が始まりました。

Jポップにのせた軽快な構成の赤組、リーダーと全体の絶妙な掛け合いで一体感を見せた緑組、ソーラン節から妖怪体操まで幅広い要素を演じきった青組。どの組も最高の演技を披露し、互いにエールを送りあって、さわやかな笑顔がグラウンドにあふれました。

最終結果は、中2高2の緑組が総合優勝。高校3年生は最後の体育祭での優勝は叶いませんでしたが、「勝ち負けだけじゃない。最後までみんなとどれだけ楽しめるかもすごく大事なこと」という生徒の言葉に、最上級生としての満ち足りた自信を感じることができました。



忘れられない思い出に

10月28～31日 普通科2年九州研修旅行

平和への祈りと信仰の歴史をたどる普通科高校2年生の研修旅行は、今年も生徒の心に多くの思い出を残しました。長崎の爆心地を訪ね、資料館で目の当たりにしたその惨状や語り部の方のお話を胸に刻みつつ、平和祈念像の前であらためて平和の尊さについて考えさせられた1日目。高校時代をともに過ごす友人たちと、楽しく充実した学校生活を送れることは「ありがたいこと、幸せなこと」なのだと思います。この研修旅行の意義がいつそう深いものになりました。

フェリーで訪ねた信仰のふるさと五島列島では、美しい海のそばに建てられた素朴なたたずまいの教会群をいくつもめぐり、この島独特の信仰のありかたを肌で感じて心落ち着くひとときを過ごしました。当地名物の「五島うどん」も、食べたことのない食感と味わいでおかわりする生徒が後をたたく。島の方々の温かいおもてなしは、おっとりとしてどこか静岡にも似ているような印象もあり、訪問する機会を得たことをとてもうれしく思いました。

さらに今年は特別な思い出がもう一つ。「福岡ソフトバンクホークス」が日本シリーズで優勝を決めた翌日、勝利の余韻が残る「福岡ヤフオクドーム」のビジターツアーに行くことができました。スタンドから特殊人工芝が敷きつめられたグラウンドへ降りると、まだ昨夜の歓声が聞こえてくるようで、とても興奮しました。また、選手たちが使うロッカールーム、ブルペン、会見場、ベンチなど、まさに選手でなければ入れないようなところにまで案内していただき、本当に楽しかったです。

来年は戦後70年。後輩たちの旅にも、きっとまた特別な出会いや巡り合わせがあることでしょう。



Welcome! Friends from Nagle!

12月11日
オーストラリア・ナグル生来日歓迎会

オーストラリア・メルボルン郊外にあるナグル・カレッジと本校の交流は、今年で12年目。1年おきに行なわれているナグル生の来校を歓迎して、今年もマリアンホールで交流会を行ない、数日間をともに過ごすオーストラリアの友人たちと親交を深めました。

来日したみなさんは、日本の文化に強い興味を持っていて、ほとんどの生徒が日本語を学んでいます。一人ひとりが用意してきた自己紹介のスライドに日本語でのアナウンスをつけ、オーストラリアの家族や友人のこと、自分の趣味のこと、学校生活のことなどを話してくれました。恥ずかしそうな生徒もいれば、上手な日本語を話す生徒もいて、個性が際立つプレゼンテーションでした。サレジオ生からは歓迎の意味を込めて、日本舞踊（高1望月さん）と和太鼓（高2久我君）を披露。高校生徒会から記念品を贈呈して、和気あいあいとした雰囲気の中に会が終わりました。

その後は、ペアを組んだホスト生徒といっしょに授業を受けたり、書道や茶道といった日本文化に触れる経験をしたり、カフェテリアで昼食をとったり。たくさんの方と交流ができたようです。



～生徒の声から～

◎体が大きなナグル生。用意されたスリッパから足が半分はみ出していました。大きなサイズに履き替えたものの、こちらもパンパン。それでも「OK! OK!」とってくれるおおらかさが大好きになりました。

◎制服の着こなしがとても個性的でした。聞いてみると、もともと髪や肌の色がお互いにちがうから個性を生かすということが自然なことなんだと教えてくれました。校則以前に文化が違うんだなと感じました。

栄光の記録

～平成26年度卒業生から～

後藤愛生くん(東京工業大学)

奇石など科学分野にもともと興味が強く、授業も部活動(科学部)も、「おもしろいな」と思えるものを自由に勉強するのが僕のやり方でした。数学や物理も魅力的でしたが、実益的な研究ができる材料工学を選び、独特な学究スタイルをもつ東工大に進路を決定。『自由にとことん学ぶこと』という勉強の本質にのっとって、新しい金属の可能性を極めていきたいと思います。

相山 薫さん(法政大学)

小さな頃から本を読むのが大好きだったので、出版や本の制作の仕事にずっと憧れを持っていました。「本」は、自分自身の物事の受け止め方や感じ方に新しい方向性を与えてくれます。4月からは古書店街や出版社が立ち並ぶ環境の中で学んでいきます。発信者としての感性を磨き、いつかだれかの生き方に、変化を与えられるようなステキな本を送り出したいと思います。

清野華子さん(上智大学)

私は「国際貢献」に大きな関心があり、高校入学時から上智大学を目標に頑張ってきました。そして高1でフィリピン研修に参加、モノカルチャーの実態を目の当たりにして、人々の食を支える「稲作」の導入について学びたいと真剣に考えるようになりました。将来は世界中の子供たちに、「お腹いっぱい」の幸せを届けられるスペシャリストになりたいです。

浅沼まどかさん(静岡文化芸術大学)

「宝塚」「歌舞伎」など日本の舞台芸術の奥深さに目覚めた中学時代。でも多くの人がある素晴らしさに出会えていないことを、歯がゆく感じることもありました。芸術が成り立つには社会への広がりをもつことが重要です。大学でその方法論を学び、刺激的なネットワークを広げたいです。後輩の皆さんも「好きなこと」を突きつめた進路選びができたらいいですね。

ご卒業おめでとうございます。
皆さんの前途に祝福がありますように!

ミドルステージ

第1回ミドルステージ合唱祭

平成26年11月21日(金)第1回ミドルステージ合唱祭が行なわれました。これは今までの中学合唱コンクールをミドルステージ独自の行事に変更したものです。M5、6年、そしてM7、8年生がマリアンホールステージに上がり、審査員の先生とミドルステージの児童、生徒全員の前で元気な歌声を披露しました。今年度はM5、6年生がそれぞれ学年で合奏と合唱を、M7、8年生は各クラスが課題曲と自由曲を発表しました。約二か月の練習を経てどの学年、クラスも工夫を凝らした発表になりました。審査の結果、審査員特別賞はM6年生、優秀賞はM7Aクラス、そして最優秀賞はM8Bクラスとなりました。

最優秀賞を獲得したM8Bクラスの生徒の一人は、「まさか合唱祭で優勝できるなんて思ってもいなかったのです。正直、うれしさよりも驚きの方が大きかったです。伴奏をミスなく弾くことができ、安堵したと同時に皆の歌声が今までで一番きれいで大きかったことにも驚きました。ここで優勝できたことでまた一歩成長できたし、クラス一丸となって一つのことをやり遂げたということはきっと将来に生きると思うので、この経験や思い出を大切にしていきたいです。」またある生徒は「マリアンホールは二回くらいしか借りることができず時間も限られていましたが、直前まで理想の歌声を目指して練習を続けました。そして本番ではそれぞれが真剣に意見を出し合った希望の歌を全力で歌いきって無事成功し、クラスの願いを乗せた歌は審査の結果優勝という結果になって返ってきました。その瞬間の喜びは今までの人生で最大といってもよい、そしてその時のクラスという集まりは大切なことが学べる大事な空間だと、改めて思いました。」審査員特別賞の6年生は「きんちょうでリコーダーを持っている手が汗だくだったんですが、何とか落とすことなくすみました。来年は中学で一位か二位をなれるといいなと思いました。」「審査員特別賞となりうれしかったです。練習の時よりよくなっていたので、良かったと思っています。しっかりと練習して努力したためこの結果になったと思うので、これから何事にも努力していきたいと思いました。」と感想を述べていました。

創立者ドン・ボスコも「音楽のない学校、それは、魂のない体」という言葉を残しています。このような行事から学年、クラスのみならず共に生活すること、その素晴らしさと楽しさ、喜びを分かち合う大切さを感じ取ってほしいと願います。練習の過程ではなかなか思うように上手にできなかったかもしれない、また意見が食い違つてつらい思いもしたことあったでしょう。しかしその全てを当日の発表が払拭してくれたと思います。



オーストラリア修学旅行記

「早く日本の家族に会いたいけど、ホストファミリーとも別れたくない。」

平成26年10月23日木曜日、大きなスーツケースを転がし、6年生68名が登校してきた。どの子の顔にも不安と期待が同居している。

シドニーに到着したのは、24日金曜日の朝。あいにくの曇り空で、セントメアリーズ大聖堂に到着した時には、大粒の雨が降り出していた。そんな悪天候の中でも、写真や絵で見てきたオペラハウスやシドニーの街並みを生で見て、子どもたちの顔は昨日の不安な顔が嘘のように、喜びと興奮であふれていた。

次の日の土曜日は、いよいよホストファミリーと初めて会う日。メルボルンからバスで4時間揺られ、ついにセントメアリー小学校に到着した。顔合わせのバーベキューでは、緊張でなかなかホットドックがのどを通らず、向こうから話しかけられてもなかなか言葉が出てこなくて困っていた。それでも、ホストファミリーの温かい笑顔と、どんなに間違った英語でもやさしく耳を傾けてくれる様子に、少しずつ子どもたちの緊張もほぐれたようだった。

子どもたちに次に会ったのは、27日の月曜日。



この日からセントメアリー小学校へ登校する。土日をホストファミリーと楽しく過ごし、子どもたち同士もすっかり打ち解けていた。子どもたちの会話を聞くと、英語に日本語が混じったり、足りない部分を身振り手振りで補ったりしていたが、十分に意思の疎通は図れているようだった。

授業でも、図工や音楽、体育などをセントメアリー小学校の5、6年生と一緒に受け、普段の授業とは違った雰囲気を楽しむ余裕さえあった。モーニングティーやお昼の時間には、サレジオとセントメアリーの子供たちが入り混じって大きな輪を作り、それぞれの国の遊びのことや家族のこと、自分たちのことを存分に語り合っていた。

あっという間に時間は過ぎて、29日の水曜日。ホームステイ先やセントメアリーで過ごす時間も残りわずかとなっていた。キッズフェアでは、我々教員が驚くほど、子どもたちは積極的に英語で話しかけ、会場全体が笑顔で溢れていた。そして、夜に行なわれたさよならパーティーでは、「Let it go」では劇と踊りと歌とでホストファミリーを魅了した。

そしていよいよ別れの朝がやってきた。30日木曜日。子どもたちとホストファミリーは、共に涙を流して、別れを惜んでいた。それは、たとえ6日間という短い時間でも、本当の家族のように過ごした証だった。オーストラリアで出来た新しい家族は、バスが視界から見えなくなるその時まで、大きく手を振って見送ってくれた。

過ぎてみるとあっという間に訪れた最終日の31日金曜日。家族と再会した子どもたちの安心きった顔を見て、長いようで短かった9日間も終わりを告げた。



ミドルステージ

第4回静岡サレジオ 公開研究会

平成26年11月9日土曜日に、「第4回静岡サレジオ公開研究会」が行なわれました。今年度は、研究テーマ「Intakeを中心とした授業づくり ～学び、深め、伝える力の育成を目指して～」を掲げ、4-4-4制の教育的効果の検証、特にミドルステージの授業のあり方を考える機会としました。全国各地からは、120名ほどの先生方にお集まりいただき、講師として、教育提携を組む上智大学から奈須正裕先生と和泉伸一先生、常葉大学からは黒澤俊二先生、ならびに筑波大学附属小学校からは白石範孝先生にご来校いただきました。

今回の研究会では、本校教員による研究授業だけでなく、黒澤先生の提案授業（算数）と白石先生の提案授業（国語）も行なわれ、いかに分かりやすく授業のポイントを押さえ（Input）、それを子どもたち同士の関わりの中で深めさせ（Intake）、豊かな表現に結び付けるか（Output）という、本校独自の研究方法に沿って授業実践して下さいました。子どもたちは、最初は緊張した様子でしたが、先生方の言葉を一言一句聞き逃さない熱心な考え、友達と関わっていくうちに次第にリラックスし、進んで自らの考えを伝えたり、表現したりすることができました。

午後の分科会や奈須先生による講演会では、子どもたちに負けないほど熱気を帯びた大人達の学びの姿が見られました。子どもたちの学びをより深化させ、豊かな表現につなげるためには、授業者がどう授業を組み立て、学びを支援していくのか、参加者全員で考える機会となりました。これからも授業を通した学力向上だけを目標にするのではなく、仲間と支え合い、高め合うことができる児童、生徒の姿

を追い求めて教育活動に取り組んでいきたいと思えました。



第64回全国小・中学校 作文コンクール

読売新聞社主催「第64回全国小・中学校作文コンクール」中学生の部において、M7Bの高田愛弓さんが最高賞である文部科学大臣賞を受賞しました。

受賞作のタイトルは「一期一会～その想いを紡ぐ～」小学校6年生のオーストラリア修学旅行の際、楽しい思い出とともに搭乗するはずの帰国便への乗り継ぎ飛行機の中で腸閉塞を起こしてしまい、異国での手術を余儀なくされた高田さん。その時の状況や想いを、原稿用紙40枚に及ぶ大作にまとめました。

異国の地で命を助けられたことで「一期一会」について深く考えるようになった高田さんは、今の自分に繋がる様々な出会いと絆をもたらした特異な体験を作文という形の「アルバム」に残したかった、と執筆の動機を述べています。その作品に、選考委員の先生からは「冒頭から読者を引き込み、最後まで読者を引き付ける感動的な力作。とにかく読んでみてほしい。」という賛辞をいただきました。

高田さんは、小学校時代から4年連続での入賞で、昨年12月6日には高円宮妃久子さまをお迎えしての中央表彰式が東京都内で行なわれました。久子さまからは「常日頃から『なぜ』『どうして』と感じ、発信することが大切です。」と受賞者を祝福するお言葉が述べられ、高田さんは受賞者を代表して「誰かに支えられていることを忘れずに、大切に毎日を積み重ねて成長していきたい。」と感謝の言葉を述べました。



※以下のサイトで原文を読むことができます。
<http://info.yomiuri.co.jp/event/2014/11/28/>
文部科学大臣賞(中学校)校閲済み.pdf

生活科 動物たちとのふれあい

1年生は「どうぶつとなかよしになろう」という生活科の学習の一環で、日本平動物園の動物とふれあう学習を行ないました。



11月中旬、晴天に恵まれ絶好の動物園日和でした。1年生47人が7～8人のグループに分かれ、動物について詳しいボランティアガイドさんにそれぞれ同伴していただき、園内を一周しました。ガイドさん一つひとつの動物についてのクイズをだしていただき、動物たちの意外な生態について関心を持って見る事ができました。

動物園でも人気のホッキョクグマの泳ぐ姿や肉球を真近で見たり、レッサーパンダの愛くるしいしぐさを見たりしました。他にもアライグマ、マンドリル、マレーバクなどは子どもたちに人気がありました。



午後はふれあい広場で飼育員さんからウサギについてお話を聞いた後、ほんの少し触ったり抱っこしたり、ふれあいタイムがありました。はじめはおそるおそる触っていた子ども時間が経つにつれ、ウサギの毛の柔らかさや体の温もりに触れ、「かわいい。」と声をあげていました。

学校に戻り、観察文を書いたり絵や粘土で表したりして、体験したことを振り返りました。動物とのふれあいで小さな命を感じることができた子どもたちは、またひと回り大きく成長することができました。

ずっとやっていたかった秋まつり

「秋といえば？」サレジオ小学校の子どもたちは「秋まつり！」と答えるでしょう。2年生になると自然の恵みに感謝し、年長さん、1年生のペアさん、先生方を招待して秋まつりをしています。今年は、「去年のお礼を3年生にしよう。」「同じフロアでいつも準備を見守ってくれていた4年生も誘おう。」ということで、大規模な開催となりました。

当日に至るまで、グループごとに様々な準備をしました。一番にお客さんのことを考え、「どんぐりをつけたらかわいいよ!」「幼稚園さんと1年生とその他で、投げる位置を変えたらどう?」など意見を出し合いながら協力したので、あっという間の時間でした。

いよいよ本番です。お客さんが来ると教室の中は一気に別世界。大きな声で呼び込みをする子、小さなお友達にやさしくやり方を教えてあげる子など、普段とは違う姿を見ることができました。

お客さんが行列になったお店屋さんは、懸命に働きました。予約券も大好評で、よりスムーズに大勢の人に来てもらえました。どれもこれも、子どもたちの経験からきた工夫です。丸一日やり切った姿は満足気でした。



「ずっとやっていたいくらい楽しかった!」これが、終了後の第一声です。人と関わり合うことの楽しさや周りの人を喜ばせる嬉しさに気づいたことでしょう。

有度地区青少年健全育成推進大会

「おはようございます。」大きな声が響きました。ここは、清水第七中学校体育館、壇上にはサレジオ小学校の3年生11名の姿がありました。

「今日はぼく達の学校で取り組んでいるあいさつ運動についてお話をします。」

11月16日、日曜日に行なわれた有度地区青少年健全育成推進大会での発表です。近隣の小中学校からの発表がありました。他の学校の代表が6年生以上の中、壇上の3年生は小さいながらも堂々と発表することができました。今年度の目標「あたたかな心 やさしい言葉がいっぱい」をテーマに、日ごろから取り組んでいるあいさつ運動の様子を伝えてきました。

「あいさつは、相手を明るくすることができるもの、自分も明るくなれるもの、笑顔を広めることができるもの」は、子どもたちの作文からの一節です。3年生全員が、日ごろのあいさつについて振り返る機会をもちました。当日は4、5文を暗記して発表しました。「緊張した。」「大きな声が出てよかった。」との声。みんなよく頑張りました。

イメージキャラクターの「あいさつしたいよう君」を考えた経緯や、クラスの中心となっている「あいさつリーダー」についても話してきました。また、たくさんの「あいさつ川柳」も発表できました。

あいさつを みんなにいっぱい 届けたい
あいさつで みんなえ顔で きもちいい
あいさつで 感しゃの気持ち 伝えよう

最後に、発表から。「あいさつは人と人とを結ぶ言葉だと思います。人を安心させる言葉だと思います。これからも、みんなを喜ばせたり楽しませたりしながら、感謝の気持ちを表したいと思います。」



—今年度は演劇鑑賞！—

平成26年11月25日(火)
マリアンホールにて

今年度は、劇団「民話芸術座」の皆さんをお迎えして「かっぱの笛」を上演していただきました。

開演前には、劇団の方から発声の仕方を教えていただきました。その後、4年生の代表3人と菅原教頭先生



による朗読劇が行なわれました。これは、「かっぱの笛」の予告編でもありました。

劇が始まる前、子どもたちは、いったいどんな話だろうとわくわくしていたり、初めて見る劇を楽しみにしたりしていました。今回は、4年生の代表がキャストの一人として参加しました。お千代役として寺尾帆乃花さんが選ばれ出演しました。寺尾さんによると、「最初は、すごくドキドキしていました。でも、劇団の人達はその劇の中の人になって、本物のように劇をしていたので、わたしもがんばらなくちゃと思いました。」という思いをもって演じていたそうです。また、「劇は、楽しかったです。オペレッタ

も楽しみになってきました。」と4年生がクリスマス会で演じるオペレッタへの期待も大きくなったようです。



4年生達にとっては、この劇を鑑賞したことによって、12月に控えているオペレッタへの意気込みが増してきたようです。子どもたちの感想を読んでもみると、劇団の方のように大きな声で、役になりきって演じることができるように頑張りたいと書いている子が多くいました。



今年の演劇を鑑賞し、また、来年どんな鑑賞教室が行なわれるのか楽しみになってきました。